

地域色豊かに 秋祭り

田んぼが黄金色に輝く稲穂で彩られ、
実りの秋の到来を感じるころ、
町内は秋祭り一色になる。
秋祭りは、五穀豊穡を祈る伝統行事。
地域ごとに獅子が舞い、
みこしが練り歩く。
みこしの掛け声一つとつてみても、
そこには地域の色がある。
たくさんの方の心で受け継がれてきた秋祭りは、
一つの文化でもあり、地域そのものだ。





秋晴れの空に、ライトアップされた境内に、
高々と差し上げられたみこしが映え、掛け声と歓声が飛び交った。
松前町の秋祭りは10月13日から15日まで行われ、
力強い鉢合わせや地域色豊かな神事が各地で繰り広げられた。
祭り一色に染まった3日間の町内を写真で切り取った。

祭りの文化が、
人に生きる。
まちが、にぎわう。

新立・本村みこし鉢合わせ



新立・本村みこし
鉢合わせにて



北川原みこしにて



横田獅子舞



神崎みこし



永田獅子舞



徳丸みこし



昌農内高張り



筒井炊き出し



西古泉みこし

五穀豊穰

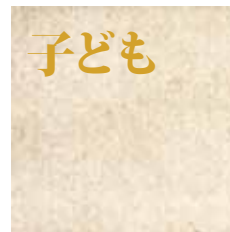
祭りをつくる思いに迫る

祭りは昔も今も、地域が一丸となって取り組んでいるもの。老若男女、さまざまな人々が祭りを盛り上げている。そんな人々の思いにふれるからこそ、祭りは人々を魅了する。祭りは笑顔をもたらし、人のつながりを深める。

「みこし」「獅子舞」「高張り」。松前の秋祭りは、この3つの神事で成り立っています。

けれど、自分が住む地域のことしか知らない人がたくさんいるでしょうし、3つは全ての地域で行われているわけではないので、「高張りって何？」など、それ自体よく知らないという人もいるかもしれません。

まずは、それぞれの神事の一部を、子どもたちの声と共に紹介します。地域の色や子どもたちの思いにふれてください。



子どもたちにとって、祭りは地域行事の楽しみの一つ。祭りを通してたくさんのことを学び、たくさんのつながりをつくり、地域への思いを育んでいきます。



昌農内「高張り」^{たかは}

13日と14日の夜は、小中学生の男の子たちが、高張り提灯をかきます。少子化などの影響で、今では就学前の子どもや女の子たちも参加しています。

昌農内地区もその一つ。幼稚園から中学生までの男女が提灯をかいています。

午後6時、集合場所に続々と子どもたちが集まってきました。「みんな並んで」。制服姿の中学生が、率先して小さな子どもたちをまとめます。愛護部の役員さんたちは「中

学生がしっかりとしてくれて助かる」と口をそろえます。神社に着くと、子どもたちは元氣いっぱい大きな声で「ドウドウメーグリー」と境内を3周し、各家々へ。神社でもらったご神灯を運ぶのです。

「モーターコイ」と人一倍大きな声でリードしていた青野遼さん(中2)は「地域の人々と一緒に回れるからうれしい。大きな声で盛り上げました」とにっこり。中島和音さん(中3)は「高張りは毎年楽しみにしている行事。小学校高学年になるにつれて、地域の伝統を受け継ぐ素晴らしい行事だということを意識し、ますます心待ちにしていました。次の中学生にも頑張ってもらいたい」と思いを託します。



青野 遼さん Aono Ryo
中島和音さん Nakajima Kazune

中川原「獅子舞」

顔つき、胴体、動作。どれをとっても地域で少しずつ違いを見せる獅子舞は、13日から15日まで行われます。

中川原地区では14日、女子中学生3人が女獅子舞を披露しました。獅子舞の太鼓に女性が参加することはありましたが、獅子役は初めてのこと。御手洗若菜さん(中2)、浮田萌香さん(同)、加藤穂乃佳さん(中1)が9月から練

習に励んできました。「前からやりたかった」と話す浮田さんは昨年、先輩の獅子舞を携帯電話で動画撮影。こっそり練習したといいます。中川原地区では、祭りごとは男性という風習がありましたが、浮田さんらの熱い要望に応えて女獅子舞が誕生。3人は重さ約1.5キロの獅子頭を持って、約15分間、華麗に舞います。

「先輩の指導は分かりやすかった。『片付けまでが踊りだ』と教えられた。獅子舞でたくさんのお話を学んだと思う(御手洗さん)」「もっと迫力が出るように踊りたい(浮田さん)」「来年は前も踊れるようになりたい(加藤さん)」と笑顔を見せる3人。中川原地区では、そんな彼女たちの姿に憧れ、たくさん女の子たちが背中を追い掛けている。

北川原「みこし」

15日は宮出しの日です。早朝、暗い内からみこしをかついで氏神に持って行き、神事が行われた後、各氏子の家々を回ります。

北川原地域では子どもみこしが祭りを盛り上げます。子どもたちは、今年新調したばかりのえんじ色の法被をまとって巡行に臨みました。各家々で、沿道で、地域の人とふれあいながら、祭りを盛り上げる子どもたち。そんな子どもたちに、大人たちは目を細めます。

前田和軌さん(中3)と谷田八雲さん(同)は「祭りが大好き」と満面の笑みでみこしを担ぎます。「中3は最後なので、しっ



谷田八雲さん Tanida Yakumo
前田和軌さん Maeda Takaki

かりまとめたい。周りを見て、事故のないように頑張る」と前田さん。谷田さんは「地域の伝統行事なので大切にしていきたい。後輩には僕らの頑張りを見ってもらって、負けなように頑張ってもらいたい」とエールを送ります。そして二人は「でも、最後じゃないや。大人になっても参加したい」と笑顔を見せていました。



西岡幹廣さん

Nishioka Mikihiro・神崎

高齢者

大の祭り好きだという西岡幹廣さん。小学生のころから参加しています。祭りでは、みこしの「運行係」として大活躍。かき手が皆「西岡さんに代わる人はいない」と口をそろえます。なんでも「前の人に足が当

お年寄りの皆さんにとって秋祭りは昔を懐かしむものではなくむしろ経験を生かし活躍する晴れ舞台。お年寄りの経験や知恵は、地域の潤滑油です。



たらないように、みこしの方向を斜めに微調整するテクニクで、スムーズな運行をさせてくれる」そうです。その技術は長年の経験で手に入れたものです。西岡さんが「立寄所が近付いたら、自然とかき手の足が早くなるので力がある。もう歳やけん引退かな」と話していると「車いすになってもしてや」というかき手の声。「よう言うわい」と返しながらも「車いすにのらないように元気でおらんといかな」と、西岡さんはうれしそうな表情を浮かべていました。

出身者

離れても、いつまでも愛され続けるふるさとの祭り。帰る人の思い、迎える人の思い。それはどちらもぬくもりにあふれ、そんな思いがさらに、ふるさとの祭りを元気にします。



池内榮さん

Ikeuchi Sakae・恵久美

高松から半世紀ぶりに松前に帰って来た池内榮さん。「高松では派手な祭りがあったけど、やっぱりふるさとの祭りがいい。47年ぶりにみこしをかいときは涙が出るほどうれしかった。みんなも温かく受け入れてくれた。地域でつながりができた。盆踊りなどふるさとのイベントにはできる限り出席している。少しでも地域に貢献したいな」



松本佳久さん・典久さん

Matsumoto Yoshihisa, Norihisa

徳丸出身で、現在松山市に住む松本佳久さん・典久さん兄弟。祭りには欠かさず参加し、みこしをかき、獅子も舞います。「獅子は小さいころからずっとやっているのが体が覚えています。町外に出ても、祭りにはやっぱり徳丸に帰りたい。年に1度、ふるさとのみんなと会えるのでうれしい。夜に出るうどんもおいしい。徳丸の祭りは最高です」



神崎の宿当番

15日のみこしの巡行では、立寄所の家々が、ごちそうやお酒をふるまい、祭りの参加者をもてなす風習があります。神崎地区では、立寄所のもてなしに加え、昼と夜は当番の「宿」がごちそうを作って、

女性

女性は「食」で祭りを支えます。「簡単でも、出来合いよりは手作りがいい」女性たちのおもてなしの心が、地域に味付けし、参加者の心も体も満たします。

ふるまいます。「宿」は、組が交代で受け持つことになっていて、当番の組の女性が協力して準備します。今年、昼食の宿は新屋敷組。組の女性陣は、朝早くから神崎集会所で腕をふるい、宿の池内昭雄さん宅へと運びました。

妻の紀代子さんは「みこしが来るときに間に合うようにしなきゃと心配したけど、思ったより早く出来て安心しました。やっぱりみんなの力があるといいね」と安堵の表情。炊いたお米は地元の新米5升。皆さんそろって「五穀豊穡に感謝し、みこしのかき手の健康をお祈りしておにぎりにしました。残さず食べてほしい」と笑顔を見せていました。



筒井の炊き出し

神崎地区のように、自宅が「宿」になって、食事を囲むところもありますが、現在は多くの地域で、公民館や集会所が「宿」になっています。筒井地区もその一つ。婦人部と体育部、小・中学校の役員さん、小学6年生のお母さんが炊き出しの担当となり、おみこしから帰ってくる子どもたちのために筒井公民館で



常盤喜美子さん 松本敦子さん
Tokiwa Kimiko Matsumoto Atsuko

炊き込みご飯のおにぎりなどを用意します。

婦人部の常盤喜美子部長は「パンにしようという声もあったけど、子どもが頑張っているからできることはしたくて。やる前は顔をしかめるお母さんも、終わった後はみんな『やつてよかった』と言ってくれます」と話します。

体育部の松本敦子部長は「簡単でも出来合いよりは手作りがいい。婦人部さんがいないとできない」と感謝します。

「地域の人みんな祭りのため、子どもたちのためによくしてくれれます。今日も朝来たら、公民館の庭がきれいになって。男の人が掃除してくれてたんです。だからみんなも自分にできることをしようと思うんでしょうね」と常盤さん。地域一丸となつてくる祭りを喜んでいました。

保存会

少子高齢化の影響で、多くの地域は伝統行事を传承することが困難になっています。一度传承が絶えてしまうと復活させることは難しくなります。地域で結成された保存会は、次世代に継承するための取り組みを続けています。

宗意原獅子舞保存会

トントン、トントコトコトン。大人が演じる獅子が登場。狩人の子役が鉄砲を片手に獅子に立ち向かいます。百年以上の歴史を持つ宗意原獅子舞は、経済成長期に入って演じ手が減り、途絶えていました。平成11年、「祭りを再び盛り上げたい」と30、



40代の男性らが一念発起。お年寄りへの聞き取りと練習を重ね、約40年ぶりに復活。以来毎年14日と15日に家々を回っています。

保存会の会長を務める篠崎育良さんは「昔、子役をしていて獅子舞が心に残っていた。今の子どもたちにも思い出を残してやりたくて」と話します。3年前には、子どもも踊れるようにと、軽い獅子に新調。獅子に関わった大人まで続けたいような保存会を目指しています。

「とにかく続いていてほしい。それだけです」と篠崎さんは願うように話していました。



篠崎育良さん
Shinozaki Ikuyoshi

永田獅子舞保存会

「永田は『荒獅子舞』といって、威勢よく大暴れする獅子。足踏みして土地の悪魔を除け、歯でかんでいるんです」と教えてくれたのは、中村文雄さん。永田獅子舞保存会の相談役として、継承活動に長く関わっています。中村さんは「獅子舞には最低30日間の練習が必要。続けることは時間も労力もかかつて大変だけど、いつまでも残してほしい」と願います。

永田獅子舞は戦争で途絶



え、戦後に復活。しかし、また途絶え、復活し今年で25年目を迎えます。

保存会の楠本正二会長は「昔は男性だけでしたが、今は太鼓も子役も女性を入れていきます。それでも演じ手集めに苦労していて、実は昨年中止になりました。規模を縮小してでもやってほしいという地域の強い要望で、昔子役をしていた高校生などの協力です。地域の応援や協力に救われる」と感謝します。

舞台から飛び出て、大暴れする獅子。歓声を上げる見物客。楠本さんは「こういう楽しいムードのまま、ずっと続けたが夢。太鼓の音は途切れさせたくない」ときっぱり。保存会のメンバーは、先人の郷土を思う心を受け継いでいこうと決意しています。



楠本正二さん 中村文雄さん
Kusumoto Shoji Nakamura Fumio



秋祭りは、先人の郷土を思う心が受け継がれているもの。長い年月をかけ、たくさんの人々が思いを重ねてきたからこそ、地域によって色があります。祭りは、地域そのものと言えるでしょう。そんなことを意識して祭りに関われば、さらに楽しむことができます。来年も、みんなで元気に祭りへ参加しましょう。地域の良さに気付くために。